

学部留学生が日常生活で体験する 日本語のバリエーション

堀口 純子（桜美林大学）
horisumi@obirin.ac.jp

1. はじめに

自分の国で日本語を学習して日本の大学に留学した留学生が、初期の段階で戸惑いを感じ、不安を抱くことの一つが、自分の日本語が通用しないことである。教科書や日本語のクラスで学習した通り「デス・マス」体で話すと、日本人学生に「変だ」と言われる。日本人学生どうしの話は「デス・マス」が付かない上にわからない単語が多くて、ほとんど聞き取ることができない。聞き取れたとしても、教科書で習った意味や用法では理解できない。アルバイト先では、教科書で習った敬語とは異なる「バイト敬語」という表現の使用を強制される。ホームステイに行くと、そこで耳にする日本語は、親子で異なっていたり、夫婦で異なっていたりする。また、留学した地域によっては、発音も文法も教科書では習ったことがない日本語、すなわち方言を多く耳にする。

日本語は、文体差や年代差や男女差や地域差など、いろいろな要素によるバリエーションがあり、それが話し手の属性、聞き手の属性、両者の関係、話の場面などによって、巧妙に使い分けられている。しかし、このようなバリエーションをすべて教科書に取り入れることはできない。多くの教科書で取り上げられているのは文体差で、そのほかに男女差を会話の中で取り上げている教科書もあるが、年代差や地域差などは一般的な教科書ではほとんど取り上げられていない。

本稿では、日本の大学の学部で日本人学生と一緒に勉強している留学生が、日常生活における日本語に対して抱いている戸惑いを概観した上で、留学生たちが「習わなかったけど使いたい」という年代差によるバリエーションの一つである若者ことばに焦点をあてて、次のような手順を設定して考えていく。

- 1) 中・上級日本語学習者である留学生が戸惑う初級語彙の若者による用法を観察する
- 2) 若者ことばに対する留学生の考えやニーズを聞き取る
- 3) 若者ことばの実態と特徴を明らかにする
- 4) 若者ことばの特徴と留学生のニーズへの対応について考える

2. 来日した留学生が戸惑う初級語彙

国で中級あるいは上級の日本語を学習して、日本へ留学してきた留学生は、日常会話はできると思っただけで来日したにもかかわらず、初級の語彙が学習した意味や用法とは異なる使われ方をしていることにまず戸惑う。その代表的な例である、「おはよう」と「大丈夫」と「ソウ系相づち」について、以下で概観する。

2-1. おはよう

2-1-1. 一日の最初のあいさつ

「大学で友人にその日1回目に会ったときに、どんなあいさつをしますか」という問いに対する学部学生59名（日本人学生54名、留学生5名）の回答を表1に示す。

表1 友だちに対する一日の最初のあいさつ

	日本人学生（54名）	留学生（5名）
おはよう	37 (69%)	1
ああ／おお	14 (26%)	
久しぶり	5	
お久しぶり		2
お疲れ	3	

日本人学生54名のうち37名（69%）が「おはよう」を使い、14名（26%）が「ああ／おお」を使う。大学では、朝以外の時間帯に初めて友人に会うことは、珍しいことではない。ということは、昼でも夕方でも、その日その友人に初めて会った場合は、70%近い日本人学生が「おはよう」というあいさつをしているということである。これは、対友人に限ったことではなく、教職員に対しても多くの学生が時間に関係なく「おはようございます」とあいさつをしているという。確かに、筆者も午後の授業の教室に入っていくと、「おはようございます」というあいさつで迎えらる。

上記の調査では、韓国人留学生1名が「おはよう」を使っていると回答したが、この留学生は韓国で日本人留学生との交流の機会が多かったため、そこで時間に関係なくその日の最初の出会いでは「おはよう」を使うということを経験したからである。

時間に関係なく、その日の1回目の出会いのあいさつとして使う「おはよう」は、以前からマスコミ関係や芸能関係や飲食業関係などでは使われていたが、一般的に使われるようになったのは、コンビニとファミリーレストランの普及が関係しているのではないかとと思われる。コンビニの始まりは、1974年5月に東京の豊洲にオープンしたセブンイレブン1号店で、翌1975年6月に福島県郡山市にオープンしたセブンイレブン2号店から24時間営業が始まり、5年後の1980年11月には1000店舗になった。急速に普及したコンビニとファミリーレストランは至る所にあり、また深夜営業をしているため、地理的にも時間的にも学生にとっては最も都合の良いアルバイト先となっている。そこでのあいさつは、時間に関係なく出勤時に「おはよう」を使い、それをアルバイト以外の日常生活でも使うようになったのではないかと考えられる。日本人学生は中学までは友人と朝から学校と一緒にいるため午後に初めて会ってあいさつをするということがないが、高校になってアルバイトを始めてから、その日初めて会ったときに「おはよう」を使うようになったという。

2-1-2. 「おはよう」と「こんにちは」

留学生は、出会った時のあいさつとして「おはよう」と「こんにちは」を習っているが、日本人学生によれば、「こんにちは」を使うのは近所の人に会った時などで、友達には使えないという。また、友達に「こんにちは」と言われたら、とても冷たい感じがするという。友達には時間に関係なく、大

学内なら「おはよう」、外で会うと「ああ」、待ち合わせをしていれば「おはよう」を使うのが普通だということである。

2-1-3. 時間に関係なく使われる「おはよう」と留学生

国でも日本の日本語学校でも、「おはよう」は朝のあいさつと教えられた留学生が、大学に行くと、日本人学生の間で「おはよう」が時間に関係なく使われているのを目の当たりにして、戸惑うと同時に、朝以外のときに、「おはよう」と声をかけられると、自分もきちんとあいさつを返して日本人学生と親しくなりたいのに、何と言えればいいかわからなくて、とても不安になってしまうという。

2-2. 大丈夫

「おはよう」と同様に、初級日本語の授業で習い、知っているのに、意味や運用が習ったのと異なるものに、「大丈夫」の最近の用法がある。最近の「大丈夫」の使い方について、中村明氏の「豊かで多様な日本語の語感をどう磨くか」（読売新聞 2011/5/31）に次のような記述がある。

美容院で洗髪の際中に「大丈夫ですか」と聞かれ、心筋梗塞でも起こしていないかを尋ねられたのかと勘違いしたという。「不快なところはないか」というのが質問の意図だったらしい。

この例のように、日本語の授業では習っていない、留学生が戸惑う使用例に次のようなものがある。

(1) (ファミリーレストランで)

客：(混雑してきたのを見て) 席、移りましょうか。

アルバイト店員：大丈夫です。

(2) アルバイト店員：ドライアイスおつけしましょうか。

客：大丈夫。

(アルバイト店員によると、「大丈夫」と言われるとどちらかわからないので、つけることにしているという。)

(3) (パン屋でパンとサラダを買う)

店員：お手ふきはおつけしますか。

客：お願いします。

店員：フォークは大丈夫ですか。

客：フォークもお願いします。

(4) (レストランで)

女子大学院生：写真とってもらって大丈夫ですか。

店員：(撮り終わった写真を見ている3人に) 大丈夫ですか。

(5) (そば屋で)

店員：(食べ終わった客の食器を指して) 大丈夫ですか。(おさげしてよろしいですかの意味)

(6) (短期のアルバイト店員の契約更新について)

短期アルバイト店員：来月も同じシフトで大丈夫です。

長期アルバイト店員：あ、大丈夫。ほかの人決まったから。

(7) (留学生のおみやげのお菓子を食べて)

日本人学生：あ、おいしい。

留学生：じゃ、もっとどうぞ。遠慮しないで食べて。

日本人学生：いいえ、大丈夫です。

これらの例に見られるように、最近「大丈夫」の使用範囲が広がり、意味が多様化し、使用頻度が高くなり、日本語の授業では習っていないような「大丈夫」を日常的に数多く耳にするため、留学生は戸惑うようである。

2-3. 相づち

日本語の教科書に提出されている相づちは「そうですね」「そうですか」「そうそう」などのソウ系が中心であるが、最近例(8)のように「たしかに」や「なるほど、なるほど」などを使い、「そうねえ」のような相づちは絶対に使わないという若者が増えている。

(8) A：おいしいね。

B：確かに。

3. 若者ことばに対する留学生のニーズ

日本に留学して来た留学生が、自由にそして楽しく話をしたいと思う相手は、留学先の大学の日本人学生と、アルバイト先のアルバイト学生である。しかし、この年代の日本人は、同年代の人と話すときには若者ことばが中心で、また、「デス・マス」体は使わない。留学生は、まずこのことに戸惑いを感じると同時に、自分も若者ことばを使いたいと強く思うようになる。

秦(2005)によれば、日本に留学している中国人日本語学習者は、若者ことばがコミュニケーションの障害になっていると考え、この障害を乗り越えるために若者ことばを理解する必要性を感じているという。

2010年の中国における調査(張 2011)でも、中国人日本語学習者は若い日本人と会話をしたいという意欲が強く、若者ことばを学習したいという希望が多いという。

2010年10月に桜美林大学学群(学部に相当)留学生5名に対して、留学生生活にかかわる種々の事項について調査したところ、「日本人の友だちが使う若者ことばがわからない」「若者ことばを習いたい」「若者ことばを使いたい」など、若者ことばに対する意見が数多く書かれていた。回答した5名全員が、次のように若者ことばの習得の必要性について述べていた。

- ・若者ことばの勉強はとても必要なので、日本語の授業で、若者ことばも習いたい
- ・留学すると同い年の日本人の友だちとかかわる機会が多くなり、若者ことばに触れる機会が多いので、事前に若者ことばを勉強したほうがよい

留学生5名から得られた若者ことばに関する記述を、「3-1. 若者ことばが必要な理由」、「3-2. 若者ことばに対する意見」、「3-3. 若者ことばの学習について」に分けて、以下にまとめる。

3-1. 若者ことばが必要な理由

留学生が若者ことばの習得が必要だという理由には、日本の大学での経験や希望があげられている。

3-1-1. 苦い経験

留学生が若者ことばの習得が必要だという理由としては、第一に次のような苦い経験がある。

- ・日本人の友だちと話していて、カタカナ語と私が知らない若者ことばがどんどん出てきて、会話

に入れなかったことがある

- ・テキストで勉強した日本語を友だちに対して使うと、「ていねいすぎて、話したくない」と感じていると思った
- ・友だちが若者ことばを使うと、意味がわからなくて、順調にしゃべれない
- ・来日して、初めて聞く若者ことばがどんどん多くなり、意味のわからないことばが多くなった
- ・意味を友だちに聞けば優しく教えてくれるが、毎回聞くと迷惑だと思い、少し困った

3-1-2. 希望と期待

留学生が若者ことばの習得が必要だという理由としては、上記のような苦い経験だけではなく、次のような若者ことばに対する希望や期待もある。

- ・日常生活の中で、日本人のともだちとたくさん会話をしたい
- ・日本人の友だちと、おもしろくて、楽しい会話をしたい
- ・若者ことばはおもしろくて、みんなのテンションを上げる
- ・若者ことばを使えば、日本人の友だちともっと近づける
- ・若者ことばを使えば、日本人の友だちともっと仲良くなる
- ・若者ことばを習えば、日本人の友だちと交流しやすくなる
- ・若者ことばを勉強して、おもしろい若者ことばを理解すれば、私にとって日本語はもっとおもしろくなっていく

3-2. 若者ことばに対する意見

留学生は、「若者ことばがわからない」とか「若者ことばを習いたい」というだけでなく、若者ことばに対する次のような意見も持っていて、ただ覚えて使えればよいと考えているだけではないことがわかる。

- ・若者ことばはおもしろい
- ・若者ことばは新鮮で、日本の若者像が見られる
- ・若者ことばは日本語の一部分だから、勉強したら日本人と交流したり、日本の文化を感じられる
- ・若者ことばは時代の産物
- ・日本の若者ことばは、韓国の若者ことばより、はやる期間が短くて、すぐ使わなくなり、新しいことばがどんどんできている

3-3. 若者ことばの学習について

3-3-1. 若者ことばを日本語の授業で習いたい理由

留学生は若者ことばの必要性を強調しているが、その学習については、「事前に」「日本語の授業で」習いたいと言っている。それは、次のような理由による。

- ・若者ことばの勉強はとても必要なので、日本語の授業で、若者ことばも習いたい
- ・若者ことばは、目上の人に対して使ったらどうしようとかの心配がある
- ・若者ことばは、言い方は簡単だが、辞書で調べても、辞書に若者が使っている意味はない

3-3-2. 若者ことばの学習経験と学習方法について

日本語の授業では、若者ことばを習ったことがないと述べている。

- ・国でも、日本に来てからも、授業で習ったことはない
 - ・韓国でも日本でも日本語の授業をたくさんとったが、若者ことばを取り扱う機会がなかった
- 習っていないが必要だと思っている若者ことばを、留学生は次のように学習しているようである。
- ・使いながら覚えてきます
 - ・韓国で日本人の友だちとの交流があったので、若者ことばを自然に覚えた

4. 若者ことばの実態

上で見てきたように、日本の大学の学部留学生は、授業やサークル活動など大学生活の中で日本人学生と友達になり、アルバイトでは年齢の近いアルバイトの学生と話をしたいと思っている。そこでコミュニケーションの障害になっているのが、若者ことばである。本節では、最近の若者ことばの実態をまとめる。

4-1. 2010年に大学生が使っている若者ことば

2010年10月に大学生が「自分が使っている若者ことば」として書き出した語を、表2にまとめる。

表2 2010年に大学生が使っている若者ことば

	日本人学生 (54名)	留学生 (5名)	合計 (59名)
1 まじ	38 (70%)	2	40(68%)
2 やばい	30 (56%)	1	31(53%)
3 うざい	26 (48%)	1	27(46%)
4 きもい	19 (35%)	1	20(34%)
5 ちょう	13 (24%)	3	16(27%)

表2からわかる通り、日本人学生の半数以上が使っているのは、「まじ」(70%)と「やばい」(56%)の2語のみである。上記の表には、使用する学生数の多い順に上位5語をのせたが、留学生を含む59名全員が書いた異なり語数は、121語である。

日本人学生にとって「若者ことば」というのは「中学生・高校生に特有のことば」で、自分が使っていることばが若者ことばだという認識はなく、違う世代や留学生などと話して初めて自分の使っていることばが若者ことばだと気付くことがある。そのため、「自分が使っている若者ことば」と言われても、自分が使っていることばのどれが若者ことばかわからないという意見が圧倒的に多かった。したがって、それを書くように言われても、わからなくてすぐには書けず、まずは自分も周りも非常によく使っている「まじ」を書き、後は各自普段の生活を思い浮かべながら思い付くままに書いたようである。このことが、半数以上の学生が書いた語がわずか2語で、異なり語数が多いという結果につながっていると思われる。

大学生になると、キャンパス、サークル、アルバイトなど日常生活にいろいろな場があり、それぞれの場によって、異なる語を使っている。すなわち、日本人学生が使っている語には、場に限定的な

語が多いと思われる。そうであるならば、このように限定的なことばを、日本語の教室で教えることに意味があるかどうかという疑問を抱かざるを得ない。

4-2. 2010年と2008年の若者ことば

2010年と2008年に大学生が「自分が使っている若者ことば」として書き出した語を、表3にまとめる。

表3 2010年と2008年の若者ことば（上位5語）

2010年の若者ことば	2008年の若者ことば	2008年の語を使わない 2010年の人数(59名中)
○1 まじ	1 がち	5
○2 やばい	2 はんばない	4
3 うざい	○3 やばい	2010年2位
4 きもい	○4 まじ	2010年1位
5 ちょう	5 JK	6

2008年の学生がよく使う語として挙げた上位5語のうち、2010年にも上位で使われているのは、2008年4位の「まじ」（2010年1位）と2008年3位の「やばい」（2010年2位）である。2008年の上位5語のうち、3語は2010年には使わないという回答もあり、2008年1位の「がち」は5名が、2008年2位の「はんばない」は4名が、2008年5位の「JK」は6名が2010年には使わないと答えている。そのほかに、2008年18位の「鬼電」（同じ人から何度も電話がかかってくる）は、2010年には「知らない」、「わからない」、「聞いたことない」がほとんどで、「使わないけど意味はわかる」が1名である。このことは、若者ことばの変化の速さを物語っているといえよう。

表3にある語の使い方としては、次のような例があげられている。

- (9) まじねむい。
- (10) 単位がやばい。
- (11) 電動自転車やばくない? (性能がすごい、すごく楽)
- (12) あの先生の授業ははんばない。(厳しい)
- (13) がちでスポーツをする。

4-3. 留学生が使っている若者ことばと意識

日本での日常生活で留学生が使っている若者ことばには、「まじ」、「やばい」、「うそ」、「私的には」、「～くない?」、「超」、「うける」、「きもい」、「オシャンティ（おしゃれ）」、「KY」、「ビミョー」などがある。「KY」と「ビミョー」は、中国人留学生の間ではやっているということだが、日本人の若者はもう使っていない語で、日本人学生から「ふるーい」という声があがった。また、留学生が使う語としてあげられた中に「がち」があるが、次のような例で使うということで、若者ことばの「がち」ではないことがわかった。

- (14) アルバイトで疲れて、学校を休みがちだ。

日本の大学に留学し、毎日を過ごしているうちに、留学生は「若者ことばを使うと効果があると感じ」て、「どんどん使うようになり」、そのうち「若者ことばとは意識しなくなり」、そのため「どんな若者ことばを使っているかと聞かれても、ぱっとは出てこなくなった」と言い、日本人学生と同じような意識になってきていることが読み取れる。そして、大学の日本語の授業では「若者ことばとは意識していなかったので、日本語会話の授業で使って先生に注意された」という経験もしている。

しかし、日本人学生があいまいな意味で使う若者ことばには、次の記述に見られるように苦労しているようである。

- ・「普通に」、「微妙に」と言われたら、相手の本音がぜんぜんわからない
- ・「みたいな」、「とか」という言い方は、相手の気持ちを考えてはっきり意見を述べるのを避けるのだと思うが、あいまいでわからない

5. 若者ことばの特徴と留学生のニーズへの対応

若者ことばは、使う場も、使う相手も、使う年代も限定的である。新入生のオリエンテーションで誘導係りをした3年生が新入生の使う若者ことばがわからなかった、授業で2年生と4年生が同じグループになってグループディスカッションをすると使うことばが違う、2歳下の妹の使うことばがわからないなど、使う年代が限定的である経験が報告されている。

また、若者ことばは変化が激しく、次々に新しいことばが作られ、その多くがすぐに消えていく。若者が使い始め、その若者ことばが広く使われるようになってきた語には、「イケメン」、「やばい（従来の意味）」、「超」、「まじ」、「ていうか」などがあるが、多くの語は消えてしまう。したがって、若者ことばを覚えても、将来的に使い続ける可能性は低い。留学生自身、習いたいと言う一方で、すぐに消えていくことも認識している。

若者ことばのこのような特徴を考えると、日本語学習者の若者ことばに対するニーズは高いが、教材を準備したり、時間をかけて教授項目の中に取り込んでいく必要はないのではないかと考える。

参考文献

桑本裕二(2003)「若者ことばの発生と定着について」『秋田高専研究紀要』38号 113-120

小矢野哲夫(2002)「流行語に見る今の世相」『日本語学』21巻13号 44-54

秦 石美(2005)『「若者ことば」の学習現状と教育価値に関する中日対照研究』『フェリス女学院大学 日文大学院紀要』12号 35-40

陣内正敬(2010)「多言語社会のコミュニケーション摩擦—「曖昧性」という課題—」『日本語学』29-14

張 曉敏(2011)『中国の大学におけるレベル差のある日本語学習者間の会話活動—学習者同士が人的リソースとなつて—』桜美林大学大学院言語教育研究科修士論文

洞澤 伸・岡 江里子(2006)『「バイト敬語」を使う若者たち—話し手の心理と聞き手の印象—』『岐阜大学地域科学部研究報告』第19号 1-31

三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』ひつじ書房